

出会い (11)

(続) 東西文化の狭間

奥村 一郎



4. 歌を忘れたカナリヤ

当時の修道院では、院長の修道名の記念日には、修道院あげて祝う習慣があった。そのときには、誰かが詩をささげることになっていた。それも、通常、新米の修道者がその役割。そこで、入会したばかりの私にその役がまわってきた。それにしても、まだ、フランスに来て間もない私には、とてもできることではなかった。日本語の詩でさえも、まともに書いたことはない。まして、フランス語となったら全くお手上げ。しかし、修道院生活で一番大切なのは、長上への絶対従順だと聞かされたばかり。はたと困った。しかし逃げるわけにもいかない。ところで、幸いに、私のような初心者には、「守護の天使」と呼ばれるアシスタントが付くことになっていた。若い神父で詩人でもあり、貴重な助け船になった。それにしても、選手交替というわけではない。何かアイディアをだすのは私。また、そこで、ストップ？受洗後まだ二年ちょっとの新信者でしかない私の頭からは、やっと、日本式の「苦しい時の神頼み」の折りぐらいしかでてこない。かといって、「心だに誠の道に叶いなば 祈らずとも神は護らん」などと呑気なことを言っておれない。こうなると、とにかくにも、全知・全能・全善といわれるキリスト教の神様にでももらうしかない。だが、その祈りも即効薬ではない。すぐには、なんの名案もできそうにない。迷案すらも。しばらく、途方にくれてぼうとしていた。この「ぼう」というのがよかったのか、そのとき、ふわっと頭に浮かんできたのが、多くの人に親しまれてきた日本の童謡「歌を忘れたカナリヤ」(西条八十作詞)であった。今では、もう懐かしのメロディの中に入るのだろうか、当時ではまだ新曲。とにかく、これでよしときめた。しかし、つぎは、それをフランス語に急いで訳すという大仕事。好きな詩であっただけに、暗記していたのは幸い。早速、「守護の天使」さんに、お願いして大方の意味を説明した。さすが詩人の彼は、私なりに満足する素晴らしい翻訳してくれた。当時は、今のような、ワープロもコンピューターもなく、昔のタイプライターでなんとかしあげてくれ、祝いの日ぎりぎりに間に合ってホッとした。

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため還仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

1. 歌を忘れた カナリヤは
後ろの山に すてましょか

いえ いえ それはなりませぬ

2. 歌を忘れた カナリヤは
背戸の小敷に 埋めましょか

いえ いえ それもなりませぬ

3. 歌を忘れた カナリヤは
柳の鞭で ぶちましょか

いえ いえ それはかわいそう

4. 歌を忘れた カナリヤは
象牙の船に 銀の權

月夜の海に 浮かべれば
忘れた歌を 思い出す

上記の詩を日本語とフランス語で、丁寧に書きとめ、白い大きな包装紙に包んで、当日の祝いの折り、皆の前で荘厳に院長に無事進呈できた。

院長も名を知られた詩人であっただけに、大喜び。日本人からフランス語訳付きの日本の詩をもらうことは、またとないことだったであろう。院長は立ったまま紙を手にして、その詩を静かに小声で読み終えると、一同に短い感謝の言葉をのべて式は結ばれ茶話会に入った。そこで、院長は私にひとつの質問をだしてきた。

「第一節から第三節までのことは分かるが、最後の第四節では、象牙の船に乗って月夜の海に浮かんだとき、そのカナリヤは、忘れた歌を思い出したというけれど、そこに、どういう因果関係があったのか？説明してほしい」

褒められて少しいい気になっていた私は、不意を突かれたように、一瞬ギクツとした。言われてみれば、確かにそう。しかし、これは詩なのだから、物理学や哲学のような論理などはない。詩人の院長なら、もう少しロマンチックであればよいのに、と心の中で呟いたものの、悲しいかな、語学力の不足、淋しい苦笑いをして場を凌ぐしかなかった。そこに見られる正確な論理を得意とするフランス人の体質に対し、理論よりも詩的感性を好む日本人の私に



1952年 カルメル会修道院（タラスコン、フランス）にて

はまことにガッカリ。どちらかといえば、人間を中心におく西欧文化の自然観に対し、自然と人間の一体感を特色とする東洋的自然観、とくに、日本文化にあるその特質がはっきりと対照的にあらわれていた。地球規模で生きなければならない現代人類にとっては、このような文化の両面を活かす総合的人間観が今後の課題となるであろう。これも、前号に続く、フランスでのカルチャーショックの症例。

5. “動く”チーズ：小さくて大きな思い出

上記の院長にかかわるもう一つの小話。

私がフランスのカルメル会修道院に入ったのは、もうすでに、五十年近く前。当時のフランス料理といえば、世界一流であったが、修道院の食事とては、そんなものとは、凡そ縁遠い貧しさそのものであった。せめて高級料理とあまり変わらないものがあつたとすれば、フランス人自慢のチーズぐらい。これだけは、フランス人の好物で欠けることはなかった。

ところで、ある日のこと、デザートのカーズを食べようとすると、細くて白い小さな蛆が二匹、カーズの中から、体をくねらせながら出たり入ったりしている。いつか、台所の外の底の下につるしてあつたカーズ籠に黒い蠅がいっぱい集まっていたのを見てぞっとしたことがあつた。それを思い出すと、なお一層気味が悪くなり舌も動かなくなりました。しかし、修道院では、出されたものは、なんでも食べてしまわなければならない、というきまり。私が、モジモジしていることに気付いた院長は、黙ったまま、私の方を見て軽く合図をした。皿をもつてそっと立っていくと、院長は、自分のデザートと皿ぐるみ取り換えてくれ、なににもなかったかのように、蛆のカーズをそのまま食べてしまった。私は驚いた。蛆を食べないですんだものも身も縮む思いだつた。院長は、それこそ、チブスかなにか、お腹を壊してしまうのではないかと、本気で心配した。ともかく、夕食を終えて皆と一緒に修道院の中庭にでけると、院長は、優しく微笑みながら、私に話しかけてきた。

「あなたは、どうして、あのカーズを食べなかったのですか？あのカーズはとてもおいしいのに！あれは、“動くカーズ”という

のです」と、さらっという院長の顔は天使のように爽やかであつた。「動くカーズ」、ほんとにそんなものがあるのかどうか？今も半信半疑。まだ、辞書で確かめたこともない。しかし、そこで腹をこわそうと、そして死んでしまおうと、とにかく、私のために蛆のカーズをいかに美味しくそれに食べてくれた院長の勇気ある兄弟愛。小さな二匹の蛆虫との不幸な一時の出会いが、大きな愛を伝えてくれる人間との幸いな出会いとなることに眼を開かれた思いであつた。

写真展のご案内

P.G.I. (虎ノ門)

9月16日(木)ー10月29日(金)
奥村光也 作品展
Mitsuya Okumura "Angle of Silence II"
11月8日(月)ー12月22日(水)
三好耕三 作品展「横丁」
Kozo Miyoshi "Neighborhood"



©Mitsuya Okumura
Bartlett Arboretum, Connecticut 1996

P.G.I. Shibaura (芝浦)

9月20日(月)ー10月30日(土)
普後均 作品展「見る人」
Hitoshi Fugo "Waterfall Watchers"
11月5日(金)ー12月18日(土)
森永純 作品展「波一海」
Jun Morinaga "Sea-on the Waves"



PHOTO GALLERY
INTERNATIONAL

□ フォト・ギャラリー・インターナショナル(虎ノ門)
東京都港区虎ノ門 2-5-18 Tel. 03 3501 9123
月ー金 11:00ー19:00 土・日・祝 休館
地下鉄銀座線虎ノ門駅下車 2番出口より徒歩5分

□ P.G.I. 芝浦
東京都港区芝浦 4-12-32 Tel. 03 3455 7827
月ー土 11:00ー18:00 第2・4土・日・祝 休館
JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分
ゆりかもめ 芝浦埠頭駅より徒歩15分

*表紙の写真

ロバート・バイヤース作品

[Weeds Against Old Car, Near Mariposa, California, 1994]

一見して、版画のような作品ですが、初冬の日差しに照らされて、枯れた雑草の影が印象的な構成です。おそらくオールドカーは放置されたらしく、ペイントが剥がれ、錆び付いていて、抽象的なイメージを与えます。この画面からはオールドカーの面影は想像できませんが、効果的な背景を成し、「栄枯盛衰」のことが思い浮かびます。